

地域計画特論(12)

陰陽五行説の基礎(東洋的思想の導入)

■陰陽説

■五行説

■五行の法則

■十干・十二支

■お伽話と陰陽五行



■陰陽五行説

古代中国に起源をもつ哲理。一切の万物は陰・陽二気によって生じ、五行中、木・火は陽に、金・水は陰に属し、土はその中間にあるとし、これらの消長によって天地の変異、災祥、人事の吉凶を説明する。(広辞苑)

日本民族は、千年余の昔から国外から移入、舶載された文物・文化を好む傾向が強く、先進国の哲学、新思想に出会うと全力を挙げてこれを消化吸収して来た。先進国で発明発見された原理と応用実践することにおいてすぐれている。新規のものに熱中するあまり、旧来のものを捨てて顧みず、捨て去るようにみえるが、表面からみえにくくするというのが適当。

■陰陽五行説の影響

- ・東洋医学の基本的な理論
- ・風水学との関係
- ・陰陽道・山岳信仰・修験道・密教・道教
- ・冠位十二階(聖徳太子)
- ・日本の民俗、文化(節供、土用、鬼門、占いなど)

■陰陽説

現在のところ陰陽説がいつごろ誕生したのかを明確に立証する文献はない。

「左伝」(春秋左氏伝)・・・「春秋」の解釈書30巻(紀元前六世紀)に「陰」「陽」が記載されている。

(ただし、天の六気:陰・陽・風・雨・晦・明のなかにある自然の一部)

「淮南子」によると、宇宙の原初唯一絶対の存在を「混沌」(カオス)としてとらえている。

「混沌」のなかからやがて、澄んで、清く、明るく、軽い「陽」の気が昇って「天」となり、そのあとに重く濁って暗い「陰」の気が下降して「地」となった。

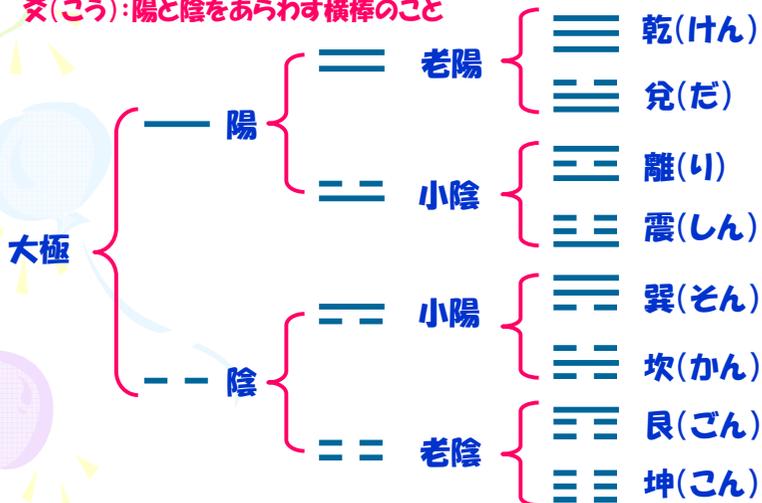
大元の大元気が陰陽の二気にわかれ、天と地になった。したがって両者の性質はまったく相反するが、元をたざせば混沌という「同根」である。

「天地同根」「天地往来」「天地交合」(三原則)

■周易

「周易」:物事の判断の是非を占うという目的
自然現象の吉凶と人事(政・道徳)の吉凶を同一視

爻(こう):陽と陰をあらわす横棒のこと



八卦
はっか

■六十四卦

小成卦は三画で、これだけで宇宙の複雑な理を表現することは難しい。三画をかさねて六画として、大成卦の完成となった。

■六十四卦

☰	☷	☱	☲	☴	☵	☶	☳	☰	☷	☱	☲	☴	☵	☶	☳
坤	艮	坎	巽	震	離	兌	乾	坤	艮	坎	巽	震	離	兌	乾
☰	☷	☱	☲	☴	☵	☶	☳	☰	☷	☱	☲	☴	☵	☶	☳
升	蠱	節	巽	恒	鼎	大過	姤	泰	大畜	需	小畜	大壯	大有	夬	乾
☰	☷	☱	☲	☴	☵	☶	☳	☰	☷	☱	☲	☴	☵	☶	☳
師	蒙	水	渙	解	未濟	困	訟	臨	損	井	中孚	歸妹	睽	兌	履
☰	☷	☱	☲	☴	☵	☶	☳	☰	☷	☱	☲	☴	☵	☶	☳
謙	艮	蹇	漸	小過	旅	咸	遯	明夷	賁	既濟	家人	豐	離	華	同人
☰	☷	☱	☲	☴	☵	☶	☳	☰	☷	☱	☲	☴	☵	☶	☳
比	剝	比	觀	豫	晉	萃	否	復	頤	屯	益	雷	噬嗑	隨	無妄
☰	☷	☱	☲	☴	☵	☶	☳	☰	☷	☱	☲	☴	☵	☶	☳
坤	艮	坎	巽	震	離	兌	乾	坤	艮	坎	巽	震	離	兌	乾

8種類×8種類
= 64種類

易占いを行う場合、音はメドハギという植物の茎を使った。今日では、細く加工した竹の棒を用いる。(筮竹占い)

相撲の「八卦おい！」
四方八方丸くおさまっていること

■書経に登場する五行

「四書」: 大学、中庸(礼記の2編)、論語、孟子

「五経」: 易経、書経、詩経、礼記、春秋

漢の時代に儒学の必須アイテムになった。……「五経博士」

「書経」: 中国最古の経典、周時代の政治道徳を記録した書物
別名: 尚書、20巻58編(33編: 今文尚書、25編: 古文尚書)
成立年代は一定しない。殊に古文は魏・晋代の偽作とされている。初め書、漢代には尚書、宋代に書経といった。

「書経」を構成する一篇「洪範」(こうはん)のなかに五行が示されている…「水火木金土」の順で、性質についても述べている。この時点では、以降に述べる「五行の法則」(相生・相剋)の概念は存在していなかったようである。

■五行の意味

「書経」の一篇である「禹貢」(うこう)……「六府」(5行+穀)

<天が人間に与えた人間の生活を支え養うもの>

「佐伝」……「五材」

人間の生活を営むに当たり、絶対欠かすことのできない材料・道具
⇒木・火・土・金・土 としてシンボル化した

もともと万物を生み出す原素という考えはなかった。

「五行とは天にありて五氣流行し、他にありて民之を行用する」

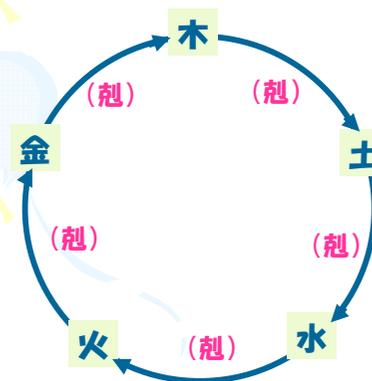
五氣: 木・火・土・金・水

「行」: めぐる、変化する、行う、利用する、使う

総括すると、五氣・五材(人間にとって必要な材料・道具・倉)が、天の監視のもと天上という空間を絶え間なく駆けめぐっており、天が五氣を人間に与えることで人間は五氣を材料・道具として生活に役立てることができるという意味。

■五行の法則 (相剋)

相手を剋していくということ。相勝説という場合もある。
木剋土、土剋水、水剋火、火剋金、金剋木



木剋土…木は地中に根を張って土を締めつけいためる。小さな採草でも同様である。

土剋水…土は水を塞き止める。水は果てしなくなれようとするがこれを止める。

水剋火…水は火をいためつける。火を消すのに最良の手段は水をかけること。

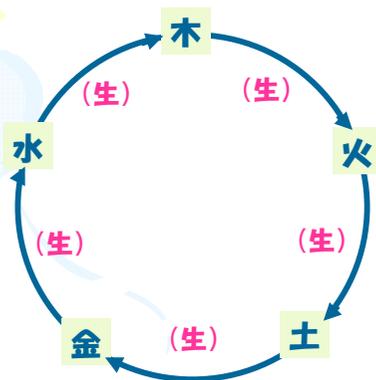
火剋金…金属は5原素の中で、最も強いものであるが、火によって溶解される。

金剋木…どびえる喬木も斧の一撃で倒される。刃物すなわち金属である。

■五行の法則（相生）

木火土金水の相互関係を示す。各要素間の親和、協調（助長し協力し合う関係）：

木生火、火生土、土生金、金生水、水生木



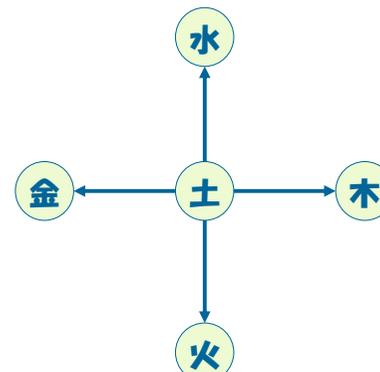
- 木生火…火を得るためのもっとも簡単な方法が木と木を擦り合わせることであった。
- 火生土…物が燃えれば、そのあとに残るのは灰である。灰は土気である。
- 土生金…鉱物、金属類の多くは土の中に蔵されている。土を掘ることによって金属を手にする。
- 金生水…空気の湿度が高い時は、金属の表面に水滴が生じやすい。
- 水生木…一切の植物、すなわち木気は水によって養われる。水がないと草木は枯死する。

■土王説

五行はすべて同格ではなく、土が他より一段と高い立場にあるという説。土を中央に位置し、他の四行に影響を与え続けているという考え方。



相生説・相剋説



土王説

■十干

古来中国では、十干を用いて日を数えていた。月の満ち欠けを観測することにより、月の周期が29日か30日になることを知っていた。（五行説の以前から成立していたものの見方）

半月…15日単位

旬…10日単位（上旬・中旬・下旬）

週…7日単位

当初両手の指は「浣（澣）カン」と表記されていた。これが転じて「干」と称されるようになった。

したがって、「十干」とは10本の指を意味するもので日を数えるために使用されたもの。

甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸（10本の指に対応）

⇒これを五行（木・火・土・金・水）に配当した。

■十干

陰陽思想は万物万象のなかに、陰陽の存在を観るため、五気のかなにも持ち込まれる。陽：活発、兄、陰：おとなしい、弟

木(きの) 兄(え):甲 … 大樹
弟(と):乙 … 灌木

火(ひの) 兄(え):丙 … 太陽の光熱
弟(と):丁 … 堤燈・ろうそくの火

土(つちの) 兄(え):戊 … 山・丘陵の土
弟(と):己 … 田畑の土

金(かの) 兄(え):庚 … 剛金
弟(と):辛 … 柔金

水(みずの) 兄(え):壬 … 海洋・大河・洪水の水
弟(と):癸 … 水滴・雨露・小流の水

■十干象意

十干の甲乙丙丁戊己庚辛壬癸の各字は、そのなかに万物の榮枯盛衰の象を内臓している。

- 甲：(鎧)草木の種子がまだ厚皮を被っている状態
- 乙：(軋)草木の幼芽がまだ伸長し得ず、屈曲の状態
- 丙：(柄らか)草木が伸長して、その形体が著明になった状態
- 丁：(壮)草木の形態が充実した状態
- 戊：(茂る)草木の繁茂して盛大になった状態
- 己：(紀)草木の繁茂して盛大となり、かつその条理の整った状態
- 庚：(更まる)草木が成熟団結してゆきずまった結果、おのずから新しいものに改まっていこうとする状態
- 辛：(新)草木が枯死して、また新しくなろうとすること。
- 壬：(妊)草木の種子の内部にさらに新しいものが妊まれること。
- 癸：(揅)種子の内部に妊まれた新しい生命体の長さが、計られるほどのなったということ。

■十二支

十二支は中国古代にすでに発見されていた五つの惑星、すなわち木星・火星・土星・金星・水星。
このうち、もっとも尊いとされた「歳星」(木星)の運行によっている。
(天空の星の基準となる星のこと)



木星の運行は、12年で天を一周する(厳密には11.86年)ので、1年には12区画のうちの1区画ずつを移行する。(これを12次という…東海道53次(宿)の「次」と同じ意味)

木星は太陽・月とは逆に、西から東に向かって移動するので、木星の反映として仮の★(神靈的な星)「大歳」を設定した。
(木星と反対の方向に、同じ速度で巡る)

⇒ 時計回りに、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥

■十二支の象意

- 子：(孳え:ふるえ)…新しい生命が種子の内部から萌し始める状態。
- 丑：(紐:ちゅう)…からむこと。芽が種子の内部でまだ伸びぬ状態
- 寅：(蟻:うごく)…草木の発生する状態
- 卯：(茂る:しげる)…草木が地面をおおう状態
- 辰：(振るう)…陽気に動き雷がきらめき、振動し、草木が伸長する状態
- 巳：(巳む)…万物が繁盛の極になった状態
- 午：(忤らう)…万物に初めて衰微の傾向が起こり始める
- 未：(味わう)…万物が成熟して滋味を生じたさま
- 申：(呻く:うめく)…万物が成熟して締めつけられ、固まっていく状態
- 酉：(ちぢむ)…万物が成熟に達し、むしろちぢむ状態
- 戌：(減ぶ)…切る、万物が減び行く状態
- 亥：(とじる)…万物の生命力が涸落し、すでに種子の内部に生命が内臓された様子をさす。

十二支は、年だけではなく、月にも日にも時刻にも配当される。
23時~1時(2時間)⇒「子刻」、1時~3時⇒「丑刻」、午前2時⇒丑刻の中心
⇒「丑満時」、午前、正午、午後…日常語の十二支

■十干と十二支の結合

十干は「十幹」とも書かれ、樹木たとえるならば幹にあたる部分である。これに対して、十二支の「支」とは「枝」のことであり、樹木の枝葉の部分の指している。

「幹」:十干 = 10種類

「枝」:十二支 = 12種類 最小公倍数 = 60種類(六十干支)

「甲子」(1)、「乙丑」(2)、「丙寅」(3)…とはじまって、……「辛酉」(58)、「壬戌」(59)、「癸亥」(60)に終わる
(生まれてから、60年を経て、生年の干支を迎えるのを還暦とする。ひとつの人生を歩き切ったことを意味し、新たにつぎの人生に誕生するという意味)

<結合の法則>

十干

陽: 甲・丙・戊・庚・壬

陰: 乙・丁・己・辛・癸

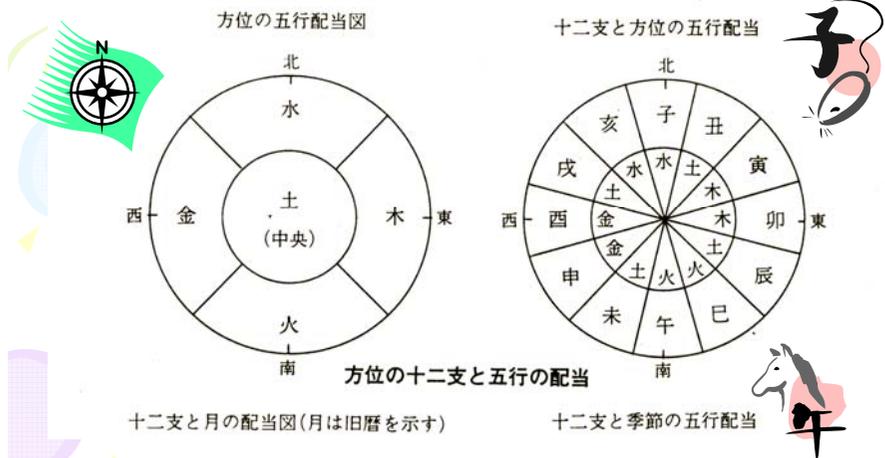
十二支

陽: 子・寅・辰・午・申・戌

陰: 丑・卯・巳・未・酉・亥

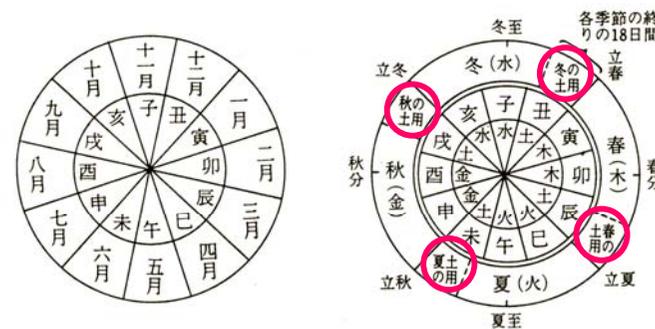
■方位十二支と五行の配当

東西南北を「四正」その間の東南・西南・東北・西北を「四隅」という。
「辰巳」「未申」「丑寅」「戌亥」に対応する



■十二支と五行の配当

四季に五行を配したとき、土気は四季の何処にも影響を強くもつとされる。
立春、立夏、立秋、立冬の前18日間=「土用」



季節と十二ヵ月の五行の配当

■五行配当表

月	易卦	十二支	十干	五声	五味	五虫	五常	五蔵	五星	五音	五事	五時	五方	五色	五行
一 二 三	震	寅卯辰	甲乙	角	酸	鱗	仁	肝	歳星	木星	呼	貌	春	東	青木
四 五 六	離	巳午未	丙丁	徵	苦	羽	礼	心	熒惑	火星	笑	視	夏	南	赤火
		辰未戌丑	戊己	宮	甘	倮	信	脾	填星	土星	歌	思	土用	中央	黄土
七 八 九	兌	申酉戌	庚辛	商	辛	毛	義	肺	太白	金星	哭	言	秋	西	白金
十 十一 十二	坎	亥子丑	壬癸	羽	鹹	介	智	腎	辰星	木星	呻	聽	冬	北	黒水

■桃太郎の陰陽五行(1)

昔々、おじいさんとおばあさんがいて、おじいさんは毎日山に柴刈に、おばあさんは川に洗濯にいった。ある日、川上から大きな桃が流れてきたので、おばあさんはそれを拾って家に帰ると、その桃の中から立派な男の子が生まれた。桃から生まれたので桃太郎と名づけた。この子は気はやさしくて力持ち、強いのである。そうしてついに悪い鬼退治に出かける。おばあさんにつくってもらった黍団子(きびだんご)を腰につけていくと、途中で、犬・猿・雉の動物や鳥に次々にあう。桃太郎の腰に下げている黍団子に皆が目をつけて、「ひとつ下さいお供しましょう」と所望する。ひとつずつそれを与えて家来にし、鬼ヶ島につく。この犬・猿・雉が大いに働いて戦は大勝利。金・銀・珊瑚・綾・錦の宝物を山と積んで帰って来る。

(1)桃

桃は古代中国で辟邪の呪物とされ、種々の伝承がある。中国の仙人、これを食すれば疲れを去り、長寿が得られるという。桃は「金果」で西方の象徴である。金気は木火土金水の五気のなかでもっとも強く強固である。金果の桃の中から生まれた桃太郎は、この金気を受けて当然強い。



■桃太郎の陰陽五行(2)

(2)犬・猿・雉

犬は「戌」、猿は「申」、雉は鳥で「酉」に還元される。申・酉・戌の三支は、金気の方角を形成し、無類に強い金気となる。桃太郎はすべてを家来として揃えることができた。



(3)黍団子

黍団子は鮮やかな黄色である。黄色は土気である。「土生金」の理によって、桃太郎・犬・猿・雉にとってこの上ない祐気の呪物である。

(4)亀

亀は「亀門」(丑寅)から現れる存在である。頭に生えた牛の角は「丑」、虎の皮でつくったパンツは「寅」を示す。(また西方の桃太郎の敵は東)

(5)財宝

桃太郎が戦勝の財宝を異次元の東方から積んで帰る。西の方角は金銀財宝、衣食住など物資の豊かさを象徴する方位であって西には財宝があり、また集まる方位である。

⇒お伽話、桃太郎は西方金気の事象と物象をすべてその一生一身のなかにおいて、実現化・具体化している理想の存在であるということ。

■今回の参考文献

1. 吉野裕子:陰陽五行と日本の民俗、人文書院、1983.
2. 吉野裕子:ダルマの民俗学－陰陽五行から解く－、岩波新書、1995.
3. 吉野裕子:陰陽五行と童児祭祀、人文書院、1986.
4. 根本光人監修、根本幸夫・根井養智著:陰陽五行説 その発生と展開、薬業事報社、1991.
5. 稲田善行:現代に息づく陰陽五行、日本実業出版社、2003.
6. 高田貞治・後藤基巳訳:易経(上)(中)(下)、岩波文庫、1978.



■講義日程に関して

- ・日程的な関係で、今週で講義を一応終了します。
- ・その他の課題に関しては、別の機会(土木工学特論など)で講義する予定です。

■課題に関して

- ・これまでの、参考文献に提示した文献のうち1冊を読んで地域計画との関係を考察してください(2~3頁)。
- ・8月中に提出をお願いします。

